

# 食卓の雰囲気と母親の言葉かけの特徴が 児童の偏食におよぼす影響

森 下 正 康  
(児童学科教授)

藤 田 の ゆ り  
(めぐみ学園めぐみ幼稚園)

食事場面における食卓の豊かさ、食卓の雰囲気、母親の言葉かけの特徴が子どもの偏食にどのような影響を与えるかを検討した。調査対象は小学校5・6年生で、記入漏れなどのない146名のデータを分析の対象とした。偏食状況、普段の食卓の雰囲気や豊かさ、食事場面での母親の言葉かけについて質問紙調査を行った。尺度に関してそれぞれ因子分析を行い、尺度を構成し $\alpha$ 係数を算出したところ、全体に高い信頼性が得られた。①偏食について分散分析を行った結果、「食卓の雰囲気」が楽しい群の方が偏食は少なく、「食卓が豊か」な群の方が偏食は少ない傾向があった。②食事場面における母親の言葉かけに関して、因子分析を基に「統制」「拒否」「行儀」「感謝」「共感」「誘導」「妥協」に関する新しい言葉かけ尺度を作成した。③パス解析の結果、母親から食べ物への「感謝」の言葉かけが多いほど、「行儀」や「誘導」「妥協」の言葉かけが少ないほど、偏食が少ないことが明らかとなった。また、食べ物についての「感謝」の言葉かけは「食卓の豊かさ」を介して偏食の減少に効果をもっていた。

キー・ワード：偏食、食卓の雰囲気、母親の態度、言葉かけ、児童

## 問 題

偏食は、食べ物への好き嫌いが偏っていることを指しているが、一般には、好きな食品ではなくて嫌いな食品に焦点が当たっている（曽根、2006）。嫌いな物を食べないという偏食について、保育園の保護者を対象とした研究では、2歳から3歳にかけて始まり、野菜や魚が嫌われることが多いという（村田・林・染谷、2003）。女子短大生の回想によると、嫌いになった時期はほとんどの食品が小学校低学年であった（鷺見・本間・遠藤、1999）。その理由としては味、臭い、食感があげられている。子どもの食習慣は、低学年から中・高学年になるにつれて大きく変化するが、その要因は家庭生活より学校生活の影響が大きいという指摘もある（川合ほか、1995）。その間に子どもによっては正しい食習慣が変化したり、偏食が治まったりするという。今田ほか（2006）は、健康に必要な食べ物の好

みの獲得が12～17歳であるのに対して、カップ麺など手軽に食べられる料理への好みは6～11歳にもっとも高かったことから、「手軽に食べられる料理」への好みの獲得をできる限り少なくすることが、小学生の偏食指導として重要だと指摘している。このように食生活について、児童期の習慣形成が重要であり、この時期に周りからの働きかけ、特に母親の働きかけの影響が大きいと考えられる。

偏食を生み出す要因にはどのようなものがあるのだろうか。偏食はすでに離乳食の時期から関連し、「調理形態・調理法」や「素材の味を伝える」ことに注意した家庭では偏食が少なかったという（村田・林・染谷、2003）。調理法や素材の味そのものが偏食にかかわっているのか、それともそのようなことを重視する母親の態度が影響しているかについては明確ではない。柳田・大森（2007）は実践研究を通して、

食に関する知識を示し、栽培から調理までを通じた教育が偏食を改善したと報告している。水津ほか（2006）の児童と保護者を対象とした研究によると、食卓の手伝いをさせるなどの保護者の意識が高まると、朝食の欠食などが少なくなり児童の食生活がよくなったという結果であった。また、母親が食事作りが好きな家庭では、子どもが大学生になると食品の嫌い度は半減したと指摘している。このような結果は、子ども自身が食物の栽培や調理の体験を通じて、食物を得るまでの苦労の認識、調理の体験や食事に関する関心、いろいろな食物を食べることが大切だという栄養に関する知識などが高まることで、偏食の減少に効果のあることを示している。

保護者と子どもを対象とした研究では、テレビを見ながら食事をする家庭、親が子どもの偏食をなおしたいと思っていない家庭、親にも偏食のある家庭など親自身の問題や食事への無関心さが浮かびあがってきた（曾根、2006；本間・鷺見・遠藤、2000）。また、幼稚園の年長児に関して保護者を対象とした調査（横山・横山、1989）において、嫌いな食べ物が多いという偏食群の方が、朝食を母親が作る割合が低い傾向が認められた。そのような調理を担当する母親の食意識には、子ども時代の食卓環境、自分の母親の食意識、現在の食卓環境、友人との食に関する情報交換の要因が影響しているようだ（高橋・石田、2011）。このような結果から、食事の豊かなコミュニケーション、母親の食事への意識や関心、調理への意欲や関心が高ければ、子どもの偏食は少なくなると考えられる。

偏食は一般に心身の発達にマイナスの影響を与えると考えられ注目されてきた（樋口・藤田・久保、2008）。しかし、心の健康にとって、栄養素の不足や偏りという食事の質より、食卓が安らぎの場であるという食卓の雰囲気や、家族そろって食べるという共食頻度の方が重要だという指摘もある（川崎、2001）。このような食事の質に関連する偏食には、家庭環境の特徴が反映されていると示唆されている。そこで、偏食に対して、食卓の雰囲気や食卓の豊かさ

（共食頻度が高く・食事のテレビ視聴が少なく・食事の手作り頻度が高い）がどのような影響を与えているかについて検討したい。みんなで食卓を囲み、食卓が楽しい心やすまるものであれば、みんなと同じものを食べようとする動機が高まると予測される。

仮説① 食卓の雰囲気が楽しく、食卓が豊かな家庭の子どもは、偏食が少ないだろう。

母親の子どもに対するしつけや態度の特徴は、子どもの偏食にも影響すると考えられている（小林、1999）。食事場面における親の態度の特徴には、文化差が認められている。東（1994）によると、母親のしつけのようすは食事場面において日米間で違いがみられた。例えば、子どもが夕食に出された野菜を嫌いだからと言って食べようとしめない場合、ほとんどの母親がなんとか食べさせようとするのは日米で共通している。しかし、母親が説得する際に持ち出す言葉かけが異なっていた。日本の母親の特徴は、子どもの自我や感情に訴え、人の気持ちを考えるように促し、自ら嫌いなものをも食べるように誘導する傾向が強い点にあった。それに対して、アメリカの母親は親の権威を持ち出し、指示命令する点に特徴があった。そのような日本の母親の誘導的な養育態度やアメリカの母親の権威的な態度は、子どもへの言葉かけを通じて具体的に示される。

食事の場面で、母親が子どもに対してどのような言葉かけをしているかについて、これまで組織的な研究はほとんどない。岩井（2004）は、学生が、保育実習中の給食で嫌いなものを食べない子や遅い子に対して、言葉かけで何とか食べさせようとしているが、その言葉かけは嘘・脅し・ごまかしの言葉かけが多かったことを報告している。そこで、東（1994）や岩井（2004）の研究を参考に、食事場面での母親の言葉かけについて、まず新しい尺度を作成することを目指した。具体的には、普段どのような言葉かけをしているか、また子どもが嫌いなものを食べようとしなないときはどのような言葉かけをしているか、このような二つの場面について、次のような言葉かけの項目を作成した。

発達心理学専攻生の協力を得ながら、項目作成を進めるなかで、母親の言葉かけは一応大きく次のようなカテゴリーに分類できることがわかった。a. 暖かい言葉かけ（例：がんばって食べたね、えらいね。みんなで食べるとおいしいね。食べものに感謝して食べようね。）b. 厳しい言葉かけ（例：ぐずぐずしていないで食べなさい。なんで食べないの。）c. 誘導的な言葉かけ（例：野菜やお米などを作ってくれた人の気持ちを考えなさい。せっかく作ったのに悲しいわ。）d. 行儀についての言葉かけ（例：おぎょうぎ良く食べようね。残さず食べようね。）

このような、母親の言葉かけの特徴が、子どもの偏食にどのような影響を与えるのだろうか。偏食をいつも気にしている母親は、子どもは食事に集中していない、子どもは楽しそうに食事をしていない、というような否定的な回答が多く、食事時の子どもに対して拒否的否定的特徴を示していた（曾根，2006）。子どもに対する否定的な見方や態度が、子どもの偏食を強めている可能性がある。このように、厳しい言葉かけや行儀についての注意が多いと楽しくない食卓の雰囲気を作り、その反対に暖かい言葉かけは楽しい食卓の雰囲気を作るだろう。そのような食卓の雰囲気が偏食に影響するものと考えられる。他方、食べることへの誘導的な言葉かけは、食卓の雰囲気を介するとともに、直接、偏食に影響すると予想される。

仮説② 暖かい言葉かけや誘導的な言葉かけが多いほど、楽しい食卓の雰囲気を介して偏食を減少させ、厳しい言葉かけや行儀について注意が多いほど、楽しくない食卓の雰囲気を介して偏食を増加させるだろう。

## 方 法

### 1. 調査対象

私立の小学校5，6年生153名から回答を得た。授業中に調査を行い、記入漏れなど除いた146名（5年生男子31・女子49，6年生男子22・女子44）のデータが分析の対象となった。

### 2. 調査期間

平成22年7月9日～7月10日

### 3. 調査内容

①偏食の程度：今田ほか（2006）の作成した偏食尺度から10項目を使用した（表1参照）。自分について「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で評定を求めた。

②食卓の豊かさ：食事の質に関する項目（川崎，2001）と、共食頻度についての項目（平井・岡本，2005）を使用した（表2）。共食頻度（夕食に家族がそろう回数）については「ほとんど毎日」「週に3～4回」「週に1～2回」「ほとんどない」の4件法で評定を求めた。テレビを見ながら食事をとっている頻度については「いつも」「時々」「つけていない」の3件法で評定を求めた。夕食の手作りの程度については「毎日手作り」「ほぼ手作り」「時々手作り」「全く手作りではない」の4件法で評定を求めた。この3項目を総合して、食卓の豊かさ尺度として使用した。

③食卓の雰囲気：平井・岡本（2005）によって作成された尺度11項目を使用した（表3）。家族みんながそろった場合の夕食に関して、どのように感じるかについて、各項目に対して「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で評定を求めた。

④食卓での養育者からの言葉かけ：はじめに予備調査として、発達心理学の専攻生9名を対象に、小学生の頃に食卓において母親からどのような言葉をかけがあったか、聞き取り調査を行った。具体的には、普段の食事場面でどのような言葉をかけられたか、嫌いなものを食べない場合にはどのような言葉をかけられたかについて自由に回答を求めた。場面ごとに結果を整理し、さらに東（1994）や岩井（2004）の研究を参考にして、それぞれ16項目と23項目を新しく作成した（表4・5参照）。本調査では、小学生に対して「今までにふだんの食事場面において養育者（母親など食事を作ってくれる人）

からどのような言葉かけがあったか、また「もし嫌いなものがあった時にはどのような言葉かけがあったか」について評定してもらった。それぞれの項目についてどの程度言われたことがあるか頻度について、「よくある」「ときどきある」「たまにある」「ない」の4件法で評定をもとめた。

## 結 果

### 1. 尺度の分析

それぞれの尺度の項目について因子分析を行った。まず主成分分析を行い、固有値の変動（スクリープロット）を参考にして因子数を決定し、最尤法による因子分析を行い、最終的にプロマックス回転を行った。最終解のパターン行列において、各因子に高く負荷する（原則として、.30以上）項目の素点の和を尺度得点とし、 $\alpha$ 係数を算出した。

①偏食について：主成分分析の結果、1つの主成分が得られ「偏食」の因子と命名した。この因子に関する尺度の $\alpha$ 係数を求めたところ、ある程度高い数値が得られた（表1）。

②食卓の豊かさ：共食頻度・テレビ視聴・手作りに関する3項目間の相関係数を算出した。その結果、共食頻度とテレビ視聴間の相関は0.045、共食頻度と手作り間の相関は0.092、テレビ視聴と手作りの相関は-0.188とマイナスの相関があった。テレビ視聴は逆転項目として扱い、一応、総合点を食卓の豊かさの指標とした（表2）。

③食卓の雰囲気について：因子分析の結果、2つの因子が得られた。それぞれに高く負荷する項目内容から、食卓が「楽しい」因子および「窮屈」因子と命名した（表3）。各因子に関する尺度について $\alpha$ 係数をもとめたところ、高い信頼性が得られた。

④食卓での言葉かけについて：新しい尺度を作成するために、普段の母親からの言葉かけ16項目について因子分析を行った。その結果、4因子が得られた。それぞれの因子に負荷の高い項目内容から次のように因子を命名した（表4）。第1因子は、「がんばって食べたね、えら

いね」「食べてくれて嬉しいわ」などの項目に負荷が高く、子どもの気持ちに添っている「共感」の因子と命名した。第2因子は「言う事を聞きなさい」「ぐずぐずしていないで食べなさい」などの項目に負荷が高く、母親の考えや気持ちを押しつける「統制」の因子とした。第3因子は「食べ物にも命があるのよ」「食べものに感謝して食べようね」などの項目に負荷が高く、食べ物を尊び「感謝」の因子とした。第4因子は、「おぎょうぎ良く食べようね」「残さず食べようね」「遊んでいないで食べなさい」という項目に負荷が高く、「行儀」の因子と命名した。各因子に関する尺度得点について $\alpha$ 係数をもとめたところ、「行儀」に関する尺度以外は高い信頼性が得られた。

⑤嫌いなものがあった場合の言葉かけについて：23項目について因子分析を行った結果、3因子が得られた（表5）。第1因子は、「好きにきなさい（つきはなして）」「そんな子どもに育てた覚えはないわ」などの項目に負荷が高く、子どもに対して冷たい「拒否」の因子と命名した。第2因子は、「食べないと病気になって外で遊べないよ」「野菜やお米などを作ってくれた人の気持ちを考えなさい」「せっかく作ったのに悲しいわ」などの項目に負荷が高く、食べるようにと暗示する言葉かけとして一応「誘導」の因子と命名した。しかし、その言葉の背景に食べることを強いるような圧力が感じられる。第3因子は、「食べられなくても大丈夫よ」「ごめんね、嫌いだったよね」「嫌だったら食べなくてもいいわよ」の項目に負荷が高く、「妥協」の因子と命名した。各因子に関する尺度得点について $\alpha$ 係数をもとめたところ、いずれの尺度も高い信頼性が得られた。

上記の母親の言葉かけ7尺度間の関連をみるために、尺度間の相関係数を求めた（表6）。その結果、「統制」と「拒否」の間、「感謝」と「共感」の間に高い正の相関がみられた。また「誘導」尺度は「拒否」と「共感」のそれぞれの尺度とかなり高い正の相関があった。「行儀」尺度は「統制」「感謝」および「感謝」「共感」「誘導」のそれぞれの尺度と正の相関があった。



これら7尺度間の構造をみるために、さらに2次因子分析を行ったところ、「拒否」と「統制」と「行儀」に共通する『厳しい言葉かけ』因子、「感謝」と「共感」に共通する『暖かい言葉か

け』因子、「誘導」と「妥協」に共通する『誘導・妥協』因子の3因子が見出された。しかし、2次因子は必ずしも単純構造を示さなかった。

表1 偏食の尺度項目 ( $\alpha$ .779)

1	食べものの好き嫌いが多い。
2	食べられない食べものの種類が多い。
3	嫌いな食べものはほとんど食べない。
4	自分の好きな食べものだけをよく食べている。
5	嫌いな味つけの食べものはほとんど食べない。
6	好きな味つけの食べものばかりをよく食べる。
10	野菜をあまり食べない。

表2 食卓の豊かさ

1	夕食に家族がそろう回数はどのくらいですか？
2	テレビを見ながら夕食を食べていますか？(*)
3	夕食はどのくらい手作りですか？

\* 逆転項目

表3 食卓の雰囲気

第1 因子【楽しい】 ( $\alpha$  .897)

- 1 楽しさを感じる。
- 2 あたたかい感じがする。
- 3 安らぎを感じる。
- 4 幸せを感じる。
- 5 にぎやかさを感じる。
- 6 のびのびできる。

第2 因子【窮屈】 ( $\alpha$  .776)

- 1 いづらい感じがする。
- 2 さみしさを感じる。
- 3 きゅうくつな感じがする。
- 4 たいくつな感じがする。
- 5 静かさを感じる。

表4 食事場面での母親からの言葉かけ

第1 因子【共感】( $\alpha$ .751)

1 がんばって食べたね、えらいね

2 これ、おいしいね

3 食べてくれて嬉しいわ

4 がんばって作ったのよ

5 みんなで食べるとおいしいね

6 これを食べたら強くなれるよ

第2 因子【統制】( $\alpha$ .798)

1 言う事を聞きなさい

2 ぐずぐずしていないで食べなさい

3 早くかたづけたいわ

第3因子【感謝】( $\alpha$ .728)

1 ご飯つぶ一つまできれいに食べるのよ

2 食べ物にも命があるのよ

3 食べものに感謝して食べようね

4 この野菜は今が一番おいしい時期なのよ

第4因子【行儀】( $\alpha$ .612)

1 おぎょうぎ良く食べようね

2 残さず食べようね

3 遊んでいないで食べなさい

表5 嫌いなものを食べない場合の言葉かけ

第1因子【拒否】( $\alpha$ .846)

1 好きにきなさい(つきはなして)

2 そんな子どもに育てた覚えはないわ

3 食べなさい(無理やりに口に入れる)

4 そのようじゃ何も買ってあげないわよ

5 なんで食べないの

6 早くしなさい、遅いわね

7 食べないと食事ぬきよ

8 残すなんてだめな子ね

9 そんなことでどうするの

10 やっと食べたわね

11 食べるのが当たり前よ

第2因子【誘導】( $\alpha$ .795)

1 これを食べないと大きくなれないよ

2 食べないと病気になって外で遊べないよ

3 野菜やお米などを作ってくれた人の気持ちを考えなさい

4 世界には食べられない人もいるのよ

5 これだけでも食べようか

6 せっかく作ったのに悲しいわ

7 あなたなら食べられると思ったわ

8 食べることになっているでしょ

9 大きくなったら笑われるよ

第3因子【妥協】( $\alpha$ .787)

1 食べられなくても大丈夫よ

2 ごめんね、嫌いだったよね

3 嫌だったら食べなくてもいいわよ

表6 言葉かけ尺度間の相関

	統制	拒否	行儀	感謝	共感	誘導
統制						
拒否	576**					
行儀	429**	327**				
感謝	-047	-050	399**			
共感	-039	033	320**	573**		
誘導	248**	533**	248**	273**	395**	
妥協	-035	136	-001	-001	297**	324**

\*\*p<.01

## 2. 仮説の検証

### (1) 食卓の雰囲気・食卓の豊かさと偏食

食卓の雰囲気と食卓の豊かさが、子どもの偏食にどのような影響を与えるかについて検討した。まず食卓が「楽しい」か、食卓が「豊か」かどうかそれぞれの尺度得点について、上位群と下位群に約半数ずつに分けた。2つの尺度の上位群と下位群を組み合わせて、偏食の平均値を求め、2要因の分散分析を行った。その結果、交互作用はなかったが、食卓が「楽しい」要因には有意差が見られ ( $F(1,142) = 5.468, p < .05$ )、食卓の豊かさについては有意な傾向 ( $F(1,142) = 3.225, p < .10$ ) が見られた (図1)。つまり、食卓の雰囲気が楽しい群の方が偏食は少なく、食卓が豊かな群の方が偏食は少ない傾向にあった。したがって、仮説①は支持された。

### (2) 母親の言葉かけと子どもの偏食

仮説②を検証するために、母親の言葉かけの特徴 (各尺度) と偏食との相関係数を算出した (表7)。その結果、「偏食」は、「感謝」の言葉かけとは有意な負の相関が、「妥協」「誘導」「統制」とは有意な正の相関が見られた。

続いて、食事場面での母親の言葉かけの特徴が、食卓の雰囲気を介して、偏食にどのような影響を与えるかについて、仮説2に沿ってAmosによる共分散構造分析を行った (豊田, 2007, 小塩, 2008, 大石・都竹, 2009)。その

表7 言葉かけ尺度と偏食との相関係数

	統制	拒否	行儀	感謝	共感	誘導	妥協
偏食	168*	155	102	-249**	020	222**	257**

\*p<.05

\*\*p<.01

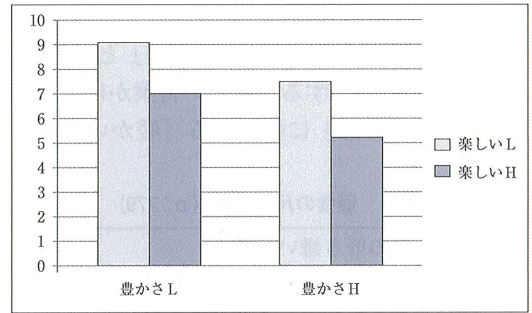


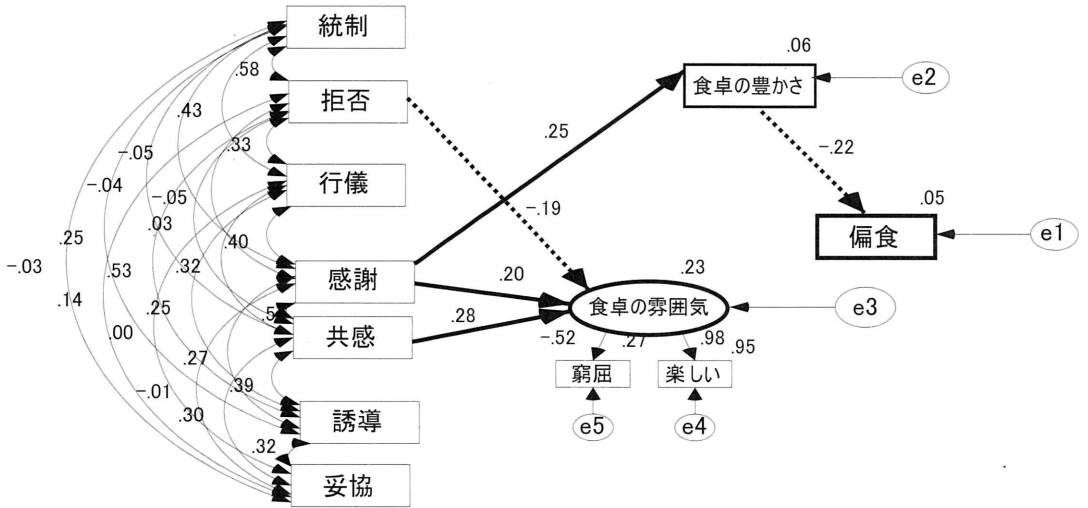
図1 食卓の雰囲気・食卓の豊かさと偏食

結果、最も適合性の高かったモデルを図2に示す。図のパス係数はすべて1%ないしは5%レベルで有意なもので、実線はプラス、波線はマイナスのパスを示す。「感謝」「共感」の言葉かけが多く、かつ「拒否」の言葉かけが少ないほど、『食卓の雰囲気』が楽しいということがわかった。しかし、『食卓の雰囲気』は「偏食」に対して有意なパスを示さなかった。他方、「感謝」の言葉かけが多いほど「食卓の豊かさ」が高く、「食卓の豊かさ」が高いほど「偏食」が少なかった。

上記のパスモデルでは、「食卓の雰囲気」は「偏食」に影響をおよぼさず「偏食」に関する説明率は5%と低かった。さらに適合性の指標も図の下部に示すように高い値ではなかった。

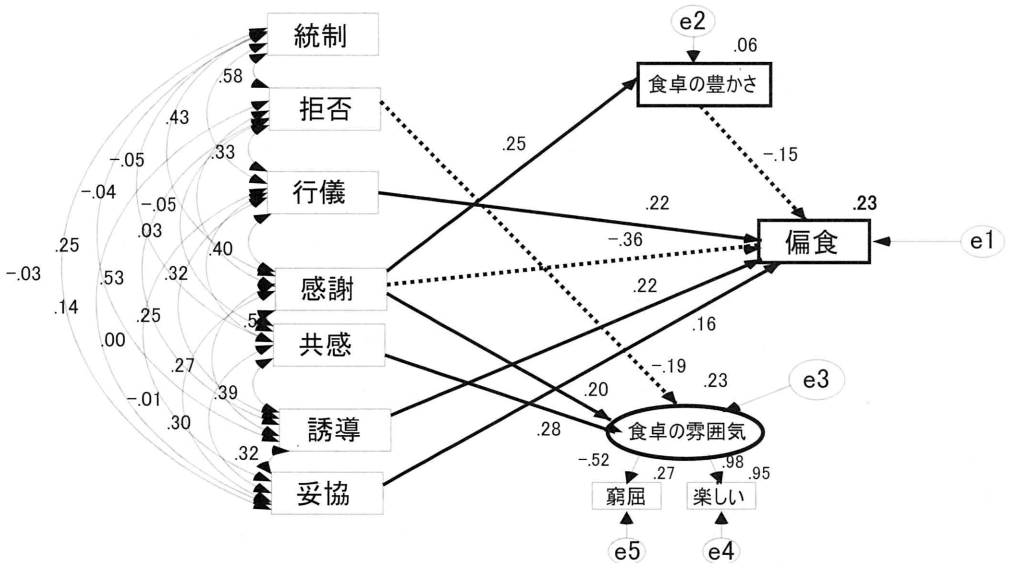
そこで、さらにさまざまなモデルを作成してパス解析や共分散構造分析を行った。その結果、モデルの適合性が最も高く、偏食に関する説明率も比較的高いと考えられるパスモデルが得られた (図3)。図の中のパス係数はすべて1%ないしは5%レベルで有意で、実線はプラス、波線はマイナスのパスを示している。

偏食に対して、「感謝」の言葉かけはマイナスの高いパスを示したのに対して、「誘導」「妥協」および「行儀」に関する言葉かけはプラスのパスを示していた。また、「感謝」や「共感」の言葉かけが多いほど、かつ「拒否」の言葉かけが少ないほど『食卓の雰囲気』は楽しいものとなるが、その『食卓の雰囲気』は偏食に影響をおよぼさなかった。それに対して「感謝」の言葉かけは「食卓の豊かさ」を解して有意なマイナスのパスを示した。このようなパスモデル



GFI=. 923, AGFI=. 811, CFI=. 887, RMSEA=. 110 (適合性が低いモデル)

図2 食卓での母親の言葉かけと子どもの偏食に関するパス図—1



GFI=. 951, AGFI=. 858, CFI=. 951, RMSEA=. 079

図3 食卓での母親の言葉かけと子どもの偏食に関するパス図—2

の適合性の指標は図の下部に示すように 比較的高い値を示し、このモデルの「偏食」に関する説明率は23%と図2の結果より高かった。

つまり、「食べ物に感謝して食べようね」「食べ物にも命があるのよ」というような「感謝」の言葉かけが多いほど、かつ「これを食べないと大きくなれないよ」や「食べられなくても大

丈夫よ」などの「誘導」や「妥協」の言葉かけが少ないほど偏食が少なくなることを示していた。さらに、「おぎょうぎ良く食べようね」などの「行儀」についての言葉かけが少ないほど偏食が少なかった。また「感謝」の言葉かけは、「食卓の豊かさ」を介して偏食を少なくさせる効果もみられた。しかし、母親の言葉かけは

『食卓の雰囲気』を介して偏食に影響せずに、直接偏食に影響することを示してしていた。そして、「誘導」の言葉かけは仮説とは逆の影響をもたらしていた。

## 考 察

本研究は、食事場面における食卓の雰囲気や豊かさ、母親の言葉かけの特徴が、子どもの偏食にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。

仮説①について、家族みんながそろう食卓の雰囲気を楽しんでいる群の方が、そうでない群よりも偏食が少なかった。そのように「食卓の雰囲気」を楽しんでいる背景には、図3の分析によって、食事場面での子どもへの「共感」や食べ物に対する「感謝」の言葉かけが多く、「拒否」の言葉かけが少ないということがあるということがわかった。そのような言葉かけそのものやその根底にある母親の優しい態度を通じて、家族間には良好で暖かな雰囲気が形成されるのだろう。このように、食事の場は単に栄養摂取の場ではなく、楽しく安らぎの場として大切な働きをしていると考えられる。

また食卓が豊かな群の方が、そうでない群よりも偏食が少ない傾向があった。ここで、食卓が豊かというのは、家族みんなが一緒に食事をする機会が多くて、食事中テレビが消えていて、手作りの食事が多いことを指している。みんなと一緒に食事をし、母親の手作りの料理やそれを重視するという態度が偏食を少なくさせている。そして、そこには母親の愛情ある態度が影響していると考えられる（安藤・山田，2004）。以上のように、食卓の雰囲気や食卓の豊かさが、偏食に影響しているという結果から、仮説1は一応支持されたといえる。ただし、ここで用いた「食卓の豊かさ」の指標の内容が、必ずしも豊かなものではない。真に豊かな食卓とは何か、それ自身が問われなければならない課題として残るだろう。

仮説②に関して、図3の適合度の高かったパス解析の結果について、食事場面での食べ物に

対する母親の「感謝」の言葉かけが多いほど、そして、「誘導」「妥協」および「行儀」についての言葉かけが少ないほど、偏食が少ないということを示していた。その反対に、「感謝」の言葉かけが少なく、「誘導」「妥協」および「行儀」についての言葉かけが多いほど、偏食が多いことを示していた。普段の食事場面において「食べ物に感謝して食べようね」などという「感謝」の言葉かけの背景に、母親の食べ物を尊ぶ態度がある。そのような母親の態度は他方で「食卓の豊かさ」を形成し、そのことも偏食を緩和していた。また、「感謝」の相関の高い「共感」は、安藤・山田（2004）が指摘するように、食べたことを一緒に喜ぶ豊かな共感性が、子どもの嫌いなものでも食べようという気持ちを高めていると考えられる。

誘導に関しては予想に反して偏食を高める方向に作用していた。すでに述べたように、子どもにとって嫌いなものがあるとき、日本の母親は、「せっかく作ったのにお母さん悲しいわ」「お百姓さんに悪いよ」などと人の気持ちに言及したりして、子どもの自我や気持ちに訴えようという誘導的態度をとってきた（東，1994）。このような誘導的態度を用いる日本の母親の背景には、子どもに言葉で説明すればわかってもらえるという期待や、子どもの気持ちを信じる態度があるだろう。子どももその親の期待に応えようとしてきたのではないか。したがって、このような誘導的態度は、日本人にとって子育て全体にわたって大切な養育ストラテジーであったのではないと思われる。

しかし、結果は反対の方向を示していた。これはどうしたことであろうか。「誘導」に関する尺度は、本来、「拒否」や「統制」とは反対の機能をもつ因子として想定された。しかし、本研究では「誘導」は「拒否」と比較的高い正の相関があり、かつ「共感」や「妥協」とも正の相関があった。したがって、子どもの気持ちに訴える「誘導」の言葉かけが、実は表面的なものであって、「…大きくなれないよ」「…外で遊べないよ」というように、その項目の表現、特に語尾のニュアンスを通して、背後に拒否や非

難が込められたものとして子どもたちに認知されたかもしれない。あるいは、その反対に、このような誘導的な言葉かけが子どもの偏食を許す「妥協」として受け取られた可能性もある。このように「誘導」という尺度が、本来の機能を示す内容にはならず、偏食に対してマイナスの効果をもたらした可能性がある。ここに、尺度作りのまずさがあったといえる。

他方、誘導的態度が、子どもの気持ちに訴え親の期待に添うように、子どもの行動を変容させるという機能を、現代は失っている可能性がある。つまり、暗示的に表現される親の期待を察して、それに応えようとするような親子のつながりが崩壊しつつあるのかもしれない。このように「誘導」尺度の内容や、あるいは誘導的態度の機能に関していくつかの疑問が残った。この問題は、あるいは本研究の対象者の特徴を反映しているかもしれず、今後、研究対象を拡大して検討する必要があるだろう。

偏食を少なくさせるためには、家庭において「手軽に食べられる料理」への好みの獲得をできる限り少なくすることが重要だと指摘されている。それは食事の手作りや料理への工夫と関連しており、そこに母親の愛情ある養育態度が関連していると考えられている(安藤・山田, 2004)。本研究の結果、食べ物に対する「感謝」の態度が「食卓の豊かさ」を介して偏食を減少させるように影響しており、この指摘を支持するものとなっている。

パス解析においては、母親の言葉かけは、「食卓の雰囲気」に影響するが、その「食卓の雰囲気」は偏食には影響していなかった。つまり、母親の言葉かけは「食卓の雰囲気」を媒介として「偏食」に影響するといいうよりは、直接的影響の方が強かったといえる。「偏食」に対する母親の言葉かけの直接的影響が、「食卓の雰囲気」を媒介する影響をも吸収してしまったと解釈される。そこで、分散分析とパス解析の結果を総合的に考察する必要があると気づかされた。

したがって、『暖かい言葉かけや』『厳しい言葉かけ』が食卓の雰囲気を介して偏食に影響す

るという仮説②は支持されなかった。「感謝」や「共感」という『暖かい言葉かけ』や「拒否」という『厳しい言葉かけ』は『食卓の雰囲気』を介さずに、直接的な影響をおよぼしていた。むしろ「感謝」の言葉かけは、「食卓の豊かさ」の方を介して「偏食」に対して間接的な影響をも与えていた。また、「誘導」の言葉かけは「偏食」を促進するような直接的な影響を与えており、仮説とは反対の結果であった。

本研究では男女や学年を込みにして分析してきた。しかし、男女によって、また年齢によって母親の言葉かけの偏食への影響は異なるかもしれない。また、母親にとどまらず、保育園・幼稚園や小学校においても、保育士や担任の先生の言葉かけの特徴が偏食に影響する可能性がある。これらは、誘導尺度の再検討と共に、今後に残された課題である。

## 引用文献

- 安藤嘉奈子・山田瑞恵 2004 過去の食卓状況が現在の食行動に及ぼす影響について～母親の養育態度や食事作りの態度との関連を中心に～共立女子大学家政学部紀要 50, 103-114.  
東洋 1994 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版  
樋口寿・藤田朋子・久保美帆 2008 大学生の精神的健康度に影響する食事因子の検討 近畿大学農学部紀要 41, 7-25.  
平井滋野・岡本祐子 2005 小学生の家庭における食事場面の諸要因と父親および母親との心理的結合性の関連 家政誌 56, 273-282.  
本間恵美・鷺見孝子・遠藤仁子 2000 偏食を生み出す要因に関する研究：子供におよぼす影響 東海女子短期大学紀要 26, 33-41.  
今田純雄・長谷川智子・坂井信之・瀬戸山裕・増田公男 2005 食の問題行動に関する臨床発達心理研究(1)―偏食の経験的定義― 広島修道大学論集 46, 第2号(人文) 97-114.  
今田純雄・長谷川智子・坂井信之・瀬戸山裕・増田公男 2006 食の問題行動に関する臨床発達心理研究(2)―偏食尺度の標準化と偏食の諸特徴― 広島修道大学論集 47, 第2号(人文) 123-148.  
岩井勇児 2004 保育者効力感と食事行動 名古屋柳城短期大学研究紀要 26, 163-175.  
川合 悟・小林久幸・中村秀夫・谷村香織・竹内美織 1995 学校生活が子どもに及ぼす影響(I) 帝塚山 短期大学紀要 人文社会科学編・自然科学編 32, 245 a-238a.

- 川崎末美 2001 食事の質, 共食頻度, および食卓の雰囲気が中学生の心の健康に及ぼす影響 日本家政学会誌 52, 10, 923-935.
- 小林真 1999 幼児の食物に対する好き嫌いとしつけ・性格との関連性 日本保育学会大会研究論文集 922-923.
- 小塩真司 2008 初めての共分散構造分析: Amos によるパス解析 東京図書
- 村田務・林薫・染谷麻子 2003 幼児の偏食と保護者の対応に関する調査 白梅学園短期大学紀要 39, 113-127.
- 水津久美子・穴井恭子・中村さゆり・山本真弓 2006 児童の食生活に関する実態と保護者の意識との関連について: 児童の元気創造をめざして 山口県立大学生活研究報告 31, 29-40.
- 大石展緒・都竹浩生 2009 Amos で学ぶ調査系データ解析: 共分散構造分析をやさしく使いこなす 東京図書
- 鷺見孝子・本間恵美・遠藤仁子 1999 偏食を生み出す要因に関する研究: 女子短大生の偏食状況 東海女子短期大学紀要 25, 37-45.
- 曾根眞理枝 2006 幼児の食事に関する母親の意識と対応: 偏食の視点からの考察 横浜女子短期大学研究紀要 21, 85-100.
- 高橋裕哉・石田 章 2011 母親の食意識を規定する背景要因 農業生産技術管理学会誌 17 (4), 145-151.
- 豊田秀樹 2007 共分散構造分析 [Amos 編] 東京図書
- 柳田多寿・大森玲子 2007 児童の食生活実態調査と食育の実践 宇都宮大学教育学部実践総合センター紀要 30, 351-360.
- 横山知弘・横山範子 1989 幼児における偏食の実態と親の養育態度の関係<sup>(1)</sup> 日本保育学会大会研究論文集 42, 188-189.